327
881

講師　香蓮院慈廣述

三信三十三訓講錄

京都　法藏館藏版

327-887

二信三十三訓講錄

大正
5. 9. 28
内交

はしがき

頃日講師蓮元慈廣師の嗣子賜君一書を手にして予か旅窓に來り曰く亡父講師嘗て信卷に於ける三信字訓の詳論せるものなきを歎き諸註を渉覽して三信字訓をは辨す此書當時の筆記なり講師生前の意志を襲き是れを公にせんとし予に屬して曰く師も講師の會下にありしもの幸に其擧を助よと予明治四十一年高倉寮に於て講師より面たり三信字訓三十三訓の詳論を聞くことを得たり故に予か筆にものせるものを以て賜君の持來せるを校し是れを公にせり諸君幸に是の書を手にし熟讀すれは如何に講師の博覽にして宗義の蘊奥を研尋せられたるかを知るに足るべしとせる事情をしるして以て序に換ふ

大正五年夏安居正信念佛偈内講せる餘暇祖堂の下客舍に於て

岸本義導誌す

三信三十三訓講錄

講師　香蓮院慈廣述　　校訂　擬講　岸本義導
筆記　嗣子　蓮　元　賜

今回信卷の三信の三十三訓の祖釋を伺はんとするに、先づ先輩光遠院略本叢林解、香嚴院六要補、同師略本發硎、理綱院略本伊嵩記、香月院廣本講義、圓乘院廣本講義、皆往院廣本報恩記、五乘院正信偈講義、開悟院廣本講義、開華院廣本全圖錄、雲澍院廣本論草、其餘他派の諸師の錄を調るに三十三の本訓義訓轉訓の調へあるはつとめたりといふべし、然れども此三十三訓は全く行者受得の能信の一心所具の安心に約する三信なれば此行者受得の能信の一心所具の安心に約する三信の三十三訓の相を古來委くせざるを遺憾とす、故に今私に行者受得の安心に約して三信の三十三訓をば辯ぜんと欲す。

今將レ講二三信ノ三十三ノ字訓ヲ一以テ二六門ヲ一分ス三別ス、第一ハ明ス辯シテ二三願ノ說意ヲ三信ノ他力ナルコトヲ上

第二(示出シテ)三信ノ誓意ヲ大悲ノ深重ナルヲ、第三(辯シ)三信ノ分齊ヲ、第四(出シ)二問答ノ義ヲ、第五(辯シ)合二爲一ノ意ヲ、第六(正ク)講ス三信ノ字訓ヲ、第一に三願の說意を示して三信の他力なることを明すとは私に十九二十十八の三願の說意を伺ふに此三願の說相は自力他力の分齊が明に示してあり、先づ十九の願なれば此一願の中に至心發願欲生の往生淨土の安心を說く前に發菩提心修諸功德と說て發能の菩提心あり能修の功德ありて此發菩提心修諸功德の自力の行を淨土へふりむけて至心發願欲生の自力の安心をおこすが十九の願の意なり、又二十の願の意は至心廻向欲生の往生淨土の安心を說く前に聞我名號係念我國植諸德本とありて田地に種を植へつける樣に如來の嘉號を以て己が善根として自力の稱名を募る、然るに此第十八願の一願には至心信樂欲生の往生淨土の安心の前に發菩提心ともなければ修諸功德ともなく又聞我名號係念我國植諸德本とも說かずして十方衆生の直き次ぎに至心信樂欲生我國と直ちに往生淨土の安心が說てある、故に此第十八願には此一願の中には至心信樂欲生の能信の爲の目的たる所信又十念の能行

の爲の所行が說てなきゆへ何なる法を信ずるのやら何なる法を十念するのやら更に其所信所行の法が分らぬ故に淨影等の諸師は此第十八願の三信を起信論等の自力の諸心にあてゝ之を解し、又西鎭の他流では信樂の信を俱舍唯識の性相の善の心所をとりて信は心をして澄淨ならしむといひて此信樂の信を己れがもちまへの自力の善の心所の一分とす、是等の諸師他流の釋は彌陀の他力廻向の信といふことを知らざるがゆへなり、問云若し爾らば此第十八願に說く信樂の能信の爲の所信の法又乃至十念の能行の爲の所行の法は何れにありや、答云善哉此問蛇の道は蛇が知る如く佛の意は佛でなければ知れぬ故に彌陀佛の第十八願の意を能く知りたまふは釋迦佛成就の金言なり、其ゆへは第十八願の三信の能信の爲の所信となる法は第十八願には說てなし、若し爾らば何れに其法を說くやといふに第十八願の御隣りの直き前の十七願に其法が說てありて彌陀如來が因位永劫に修行して佛の方に成就したまひた南無阿彌陀佛の名號の一法を第十八願の十方衆生が聞て信心歡喜し又其名號を稱へるのであると第十八願の信

樂の能信の爲の所信の法又第十八願の乃至十念の能行の爲の所行の法は第十八願に說かずして第十七願に說てある、之れが十九二十に異る難有他力廻向の說相にて第十七願の親の方にこしらへてあるほとけだねの法體成就の名號を自力のはからひなり十方衆生の子が信じ稱るばかりなり、故に彌陀の方に成就してある他力廻向の名號を聞て信心歡喜し乃至一念せん至心に廻向したまへりと說て所聞の名號全く能聞の信となり又所行の名號全く能行の乃至十念となる、此他力廻向の成就の金言を傳へたまふが善導吾祖の兩大師にて善導は散善義八紙に就行立信の中就行の行に三重あれども善導の御本意は外の行に非ず一心專念彌陀名號の正定業の他力廻向の大行なり、又吾祖の御本書の所明を伺ふに行卷の次に信卷がありて行信と次第するが此意なり、聖道通途の法相なれば發心修行の次第にて廣本の所明も聖道通途の法相なれば信卷が行卷の前にあるべき道理なり、爾るに御本書の所明は信卷は行卷の次にありて行信と次第するが此意にて聖道通途の自力の法相に異りて衆生の信ずる能信は彌陀因位永劫の御劬勞

の團丸第十七願成就の他力廻向の大行なり此大行をば第十八願の十方衆生が信ずるがゆへに信卷を行卷の次に置きて行信と次第したまふが此意である、如此十七と十八とは甚深の關係あるゆへに且くもはなすとは出來ぬ十七願は所信所行なり十八願は能信能行なり又十七願は法なり十八願は機なり此義を明に釋顯したまひたが大勢至菩薩の化現たる存覺上人なり、行卷六要七紙に十七十八更不相離行信能所機法一也と釋したまふは此意なり、又吾祖信卷の別序に獲得スルコトハ信樂ヲ發起スル自ヨリ如來選擇ノ願心ニ開闡スルコトハ眞心ヲ顯彰スル從大聖矜哀ノ善巧ニとありて此文の中獲得乃至願心とは彌陀因願の意にて信卷本卷の所明なり開闡乃至善巧とは釋迦成就の意にて信卷末卷の所明なり、故に略本には緣ニ一尊ノ大悲ニ獲タリ一心佛ノ因とある已上三願の說意を辨じて三信の他力なることを明すといふ一科を辨じ終る、實に此行信の次第は如此の次第なるゆへ眞宗の徒此行信の次第を深く尊信頂戴すべきことなり。

第二に示スシテ出ニ三信ノ誓意ノ大悲ノ深重ナルヲとは問云彌陀如來何故二心とも誓はず四

心とも願ぜず三信と誓ひたまふや、答云我等衆生に三種の不善心あるゆへ其三種の不善心を對治して三種の善心を與へんが爲に至心信樂欲生の三心の願をおこしたまへり、其衆生の三種の所對治の三種の不善心とは一は衆生の不眞實の心二は衆生の疑惑無明の心三は涅槃を欣求せざるの心なり、先づ初の衆生の不眞實の心とは此衆生の不眞實の心を開けば衆生の不清淨の心あり此衆生の無始已來の不眞實心と不清淨心とを對治せんが爲に彌陀如來因位永劫に清淨眞實の至心のまことゝろを成就したまふ、問云言典に關からざるは君子の慚るところ汝今明に其證文を出せ、答云御自釋ニ紙十に一切群生海自ニ從無始ニ已來乃至今日至ニ今時ニ穢惡汚染ニシテ無ニシテ清淨ノ心ニ虛假諂僞ニシテ無ニシテ眞實ノ心ニ是ヲ以テ如來悲ニ憫シテ一切苦惱ノ衆生海ヲ於不可思議兆載永劫ニ行ニジタマフ菩薩ノ行ヲ時三業ノ所修一念一刹那モ無ク不ニトイフコトレ清淨ニ無ク不ニトイフコトレ眞心ニ如來以ニテ清淨ノ眞心ヲ成ニ就シ圓融無碍ニ不可思議不可稱不可說ノ至德ニ以テ如來ノ至心ヲ廻ニシタマフ施一切煩惱惡業邪智ノ群生海ニ則是レ彰ニスカ利他ノ眞心ヲ故ニ疑蓋無シレ雜斯至心ハ則是レ至德ノ尊號ヲ爲ニ其體ト也とありて次に大經勝行段の

文異譯ノ文次に散善義至誠心の釋を引きたまふ、今此所引の文の意を解せば不生欲覺等の欲とは貪欲なり、瞋とは瞋恚なり、害とは惱害にて心には害心を抱き口には惡口をいひ身には刀杖等をもて他をなやますことなり、又覺とは覺知の義にて新譯では尋の心所なり是は所緣の境をなにものなりやと尋求すること、又不起欲想等とは三覺をおこす因となるが三想にて是は所緣の境をかたどる想の心所なり、法藏菩薩は三覺の因となる三想をもおこしたまはぬといふこと、又不着色聲等とは前の三想をおこす緣となる所緣の六境にて眼耳鼻舌身意の六根に色聲香味觸法の六境をてらして是に着するゆへ三想三覺を起す、然るに法藏菩薩の六根は其色聲等の六境に少も着したまはぬゆへ三覺三想を生じたまはず又おこしたまはぬ等といふことなり、問云此勝行段の不生欲覺等の文を案ずるに此三覺三想をおこすは凡夫にあることゆへ凡夫が轉迷開悟の爲に修する凡夫の修相なり大乘の通談なれば初地已上の聖者は貪等の煩惱をおこさず況や法藏菩薩は八地已上の聖種性の菩薩にて純無漏相續なれば貪等の煩惱のおこるべ

き筈なし爾るに此貪等の煩惱を生ぜず起さずとは無必要の經說にあらずや、答云此不審あるゆへ大經の望西樓疏に之を問答してこれは其行德を顯すのみとい ふてある、悲哉これでは阿彌陀如來の深重の大悲がかくれてしまふなり、是は前に引ける吾祖大師の御釋の如く我等衆生は無始已來今日今時に至る迄穢惡汚染にして淸淨の心なく虛假諂僞にして眞實の心なき惡人女人の爲に我等が修せねばならぬ難行を我等衆生になりかはり一念一刹那も淸淨ならずといふことなり眞實ならずといふことなき大慈大悲の御修行にてこれは大必要の金言なり此金言を拜して何ぞ感佩せざらんや、是は三世の諸佛にも恒沙の如來にも曾てこれなき彌陀佛不共の別德なり已上三信の中至心の生起終る、次に三信の中の信樂の生起を出さば我等衆生は久遠刼來疑惑無明の心あるゆへ是を對治せん爲に信樂を誓ひたまふ、其ゆへは御自釋（二十四紙）に然從無始已來一切群生海流轉無明海沈迷諸有輪繫縛衆苦輪無淸淨信樂法爾無眞實信樂是以無上功得難值遇最勝淨信難獲得一切凡小一切時中貪愛之心常能汙善心瞋

憎之心常能燒法財急作急修如炎頭燃衆名雜毒雜修之善亦名虛假諂僞之行不名眞實業也以此虛假雜毒之善欲生無量光明土此必不可也何以故正由如來行菩薩行時三業所修乃至一念一刹那疑蓋無雜斯心者卽如來大悲心故必成報土正定之因如來悲憐苦惱群生海以無碍廣大淨信廻施諸有海是名利他眞實信心とありて夫より第十八願成就の文如來會の文涅槃經の三文華嚴經の三文論註の二文を引きたまふ、此諸文の意は一切群生海疑網に覆はれて涅槃の眞因を成ぜず空く生死に流轉して出離の緣あることなし等とある文の意なり、此文の意を已に元祖は選擇集の三心章に生死家に以疑爲所止涅槃城に以信爲能入とのたまひて我等衆生には不了佛智の疑無明ありて明信佛智の信心の智慧を成ずることあたはず、故に彌陀如來苦惱の群生海を悲憐して衆生になりかはりて因位永刼に一念一刹那も瞋恚をおこさず貪欲を生ぜず身口意の三業に諸の行を修したまふに更に疑惑の無明なく智慧淸淨にして報土正定の因を成就し、廣大無碍の淨信を以て諸有の群生海に廻施

したまふゆへ我等衆生が疑ひはれて明信佛智の信心をうる、應レ知彌陀如來因位永刼に信樂を成就したまふは我等衆生の不了佛智の疑無明を對治せんが爲なり已上信樂の生起終る、後に三信の中欲生の生起を出さば衆生無始已來愛欲に耽着して涅槃を欣求せず故に彌陀如來之が爲に廻向心を成就して得生の想をなさしむ、故に御自釋（二十五紙）に云然微塵界ノ有情流二轉煩惱海一漂二沒生死海一無二眞實ノ廻向心一無二清淨ノ廻向心一是故如來矜二哀シテ一切苦惱群生海ヲ一行二シタマフ菩薩行一時三業ノ所修乃至一念一刹那廻向心ヲ爲レ首ト得二成就大悲心ヲ一故以テ二利他眞實ノ欲生心ヲ一廻二施諸有海ニ一欲生ハ卽是廻向心ナリ斯則大悲心ナリ故ニ疑蓋無レ雜とある、此文の中に廻向心ヲ爲レ首得レ成二就大悲心一故とある是が三世十方の諸佛に曾てなき彌陀不共の別德にて諸經論の中に諸佛は大悲を首としたまふといふ說はあれども廻向を首とするといふ經說更になし、前の至心の生起の下に於て大經勝行段の經說を引て辨ずる如く罪惡は山の如くあれども一善一行は曾てなき我等が爲に大善大功德を成就して令諸衆生功德成就と苦惱の有情に廻向したまふ故に御引用の論註に二

ヶ所廻向を首として大悲心を成就すとのたまふ其源は令諸衆生功德成就の金言なり、又本論では（三紙）に廻向ヲ爲レ首ト得レ成二就大悲心一ヲとのたまふ此意を和讃に如來の作願をたづぬれば苦惱の有情をすてすして廻向を首としたまひて大悲心をば成就せりと讃じたまふ故に眞宗弘通の他力廻向の法門は經論師釋の確說なり何ぞ尊崇すべからざらん已上三信の生起終る。

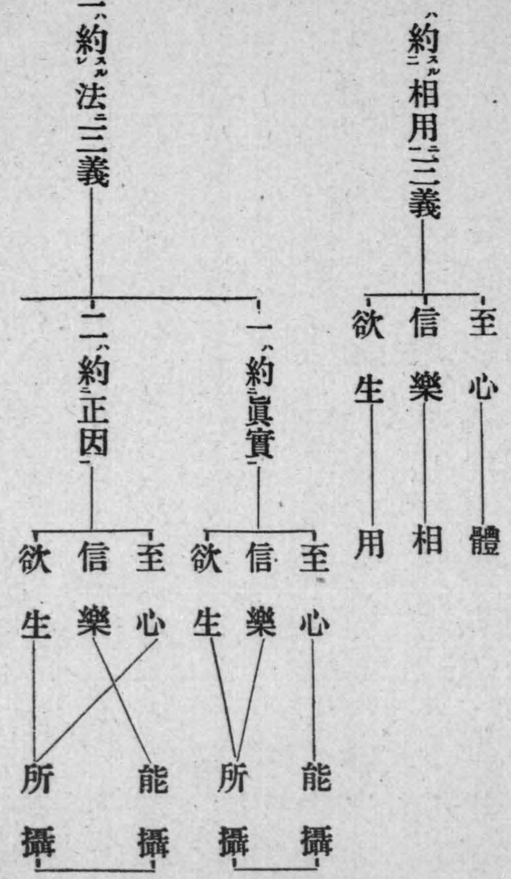
第三に辨二三信一分齊ヲとは當流には他流に異りて此三信に付て法に約して談ずると機に約して談ずるとの御相承の釋あり、此約機約法の義は源と大經の金言より出たり、其佛の金言とは成就の文の其名號とは約法なり聞信心歡喜乃至一念とは約機なり、如此約機約法の所談は全く他力廻向の大信なることを顯したまふ吾祖の宗意なり、上に已に辨ずる如く諸師他流は此三信を凡夫のむまれつきの自力の三信とす、信卷に此第十八願に五名ある中第三に本願三心の願と名けたまひて此至心信樂欲生の三信は元と彌陀如來が因位永刼に成就したまふ三心にして此三心を行者に廻向したまふ故に此三信に約機約法のとりあつかひが

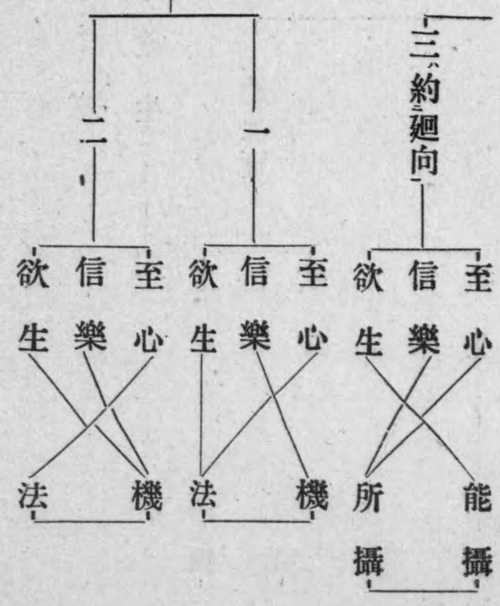
ある、約機といへばとて西鎭の如き自力の機にあらず彌陀の方よりもらひうけたる他力廻向の機なり、之に付て先輩の一說に私の義を加へて辯ぜば此三信に付て三義あり、一には佛三生三の義是は佛の方にも三信あり衆生の方にも三信ありといふ義なり、佛三の義とは至心は法藏因中の眞實なり卽大經勝行段に不生三欲覺瞋覺害覺等と說きたまふ佛の眞實至誠のまことにて是が佛の方の至心なり、又彌陀が決定必定無上正覺の諸佛の誠言を聞て一念も疑ふこゝろなく修行成滿したまふ智慧が信樂なり、又我國に生れんとおもへとある彌陀の勅命が欲生なり、偖生三とは第十八願に十方衆生至心信樂欲生我國とあれば十方衆生の機に約する約機の三信にて是が佛三生三の義なり、二には佛二生一の義とは銘文本紙初に至心は眞實とまふすなり眞實とまふすは如來の御誓ひの眞實なるを至心とまふすなり煩惱具足の衆生はもとより眞實心なし淸淨の心なし濁惡邪見のゆへなり信樂といふは如來の本願眞實にましますをふたゝゝろなくふかく信じてうたがはざれは信樂とまふすなり乃至欲生我國といふは他力の至心信樂

をもて安樂淨土にむまれんとおもへとなりとある、是は至心と欲生我國の二を彌陀に約し信樂を衆生に約す、是が佛二生一の義なり、三は佛一生一の義是は此三信佛の方にありても三信各別にあらず三心圓融の疑蓋無雜の一心なり、又衆生の方にありても無論疑蓋無雜の一心なり、問云其義何を以て知るや、答云御自釋一紙十已下に此疑蓋無雜を法に約し機に約して釋したまふ之が佛一生一の義なり、此機に約する三信におのづから體相用の三ありて至心は體なり信樂は相なり欲生は用なり如此三の義別あれども皆是れ疑蓋無雜の一心の所具なるゆへ互に融じ互に卽して無二無別なり、然れば三心三をまもらず、一心一にとゞまらず、三心卽一心一心卽三心なり、此三一を以て是を蔽へば疑蓋無雜といふより外なし、佛の方に於て三信互融するは無論なれども若し機に約する三信の互融を惡く取扱ひて信樂に至心欲生の二心を融して信具の願を談ずるはよけれども願に信を具するといふて、欲生願生を募り願生歸命を骨張するは不可なり、偖此三信各主とこころありて互に相卽相入す、若し眞實に約せば信樂欲生は

至心の爲におさめられて信樂欲生が所攝となり至心が能攝となる、此時は約法所談の至心にて眞實を以て衆生を悲憫するを信樂と名け眞實を以て廻向するを欲生と名く、爾れば欲生は信樂を體とし信樂は至心を體とす、此時は如來が淸淨眞實の心用をおこして衆生に趣くを信樂と名け亦欲生と名く故に信樂を利他眞實の信樂と名け欲生を利他眞實の欲生と名く、此時は信樂にも眞實あり欲生にも眞實あり如此一眞實を以て三信を攝する時は三信卽一の至心となる、此至心は眞實なり故に御自釋（二十三紙）に爾者大聖眞言宗師釋義信ニ知ヌ斯心則是不可思議不可稱不可說一乘大智願海廻向利益他之眞實心ナリ是名ヲ至心ト ことありて三信を釋したまふ中此至心にのみ此結釋あるは如何といふに三信の總體をあらはす至心なるがゆへなり、故に信樂も欲生も眞實のなき信樂にあらず眞實のなき欲生にあらず眞實の信樂眞實の欲生にして此至心の眞實は信樂欲生の體なるがゆへなり、若し又正因に約せば涅槃眞因唯以信心なるがゆへに三心の中正因を的示せば疑蓋無雜の一信樂なり、其證據は已に信樂の生起の下に御自釋（二十四紙）を引く如

く我等が爲に報土正定の因を成就し廣大無碍の淨信を以て我等衆生に廻施したまふ是が報土往生の正因なり、故に三信ありといへども衆生往生の正因を的示せば唯此信樂なり故に信の體に約せば至心なり正因に約せば信樂なり廻向に約せば欲生なりとしるべし。





已上三信の分齊終る。

第四に出ニ二問答ノ義ヲ一とは此二問答の義を辯ずるに付て三義あり、一は香月院の義を出し二は雲澍院の義を辯じ三は私の義を述す、先づ初に香月院の義を出すとは月院信卷の講義に云く此信卷に二問答ある中初の問答は三信を行者の機に

約し後の問答は三信を法に約して釋す、先づ此問答を機法に分ちおきて而も此二問答の全體の所明は後の問答の問は上の問答の答の中より出てあるゆへ結歸するところは上の問答の答と同く三信を信樂におさめて論主の一心で結びたまふ、爾る時は後の答も上の答と同く行者の機に約するといふが月院の義なり、又雲澍院の義を出さば講本の論草に云く此二問答は各立の問答にあらず後の問答は初の問答の答の中より開けてある、其ゆへは先づ初に論主が三を合して一としたまふ所由を問ふ其問を答ふる文を二段とす、其第一段の意は初の文の愚鈍の衆生解了し易からしめんといふ文より乃至合三爲一といふ迄は合三の所由を略示して正く答へたまふ一段なり、次に私に三信の字訓を闡ふに等の下は二に廣く卽一の義を成立するといふ一段なり、偖初の一段の合三の所由を明すに二因あり、一には機の解了に約して合三爲一を示す是は愚鈍の衆生解了し易からしめん爲といふところなり、二には佛の願意に約して合三の旨を顯す是は彌陀如來三信を發したまふといへども涅槃の眞因は唯信心を以てすとあるところ

なり、偖前段の二に廣く卽一の義を明すといふ中にも亦上の如く衆生の機に約すると佛の願意に約するとの二因あり此二因の文段が二に分れて初には機の解了に約し卽一の義を明すこれは初の問答の字訓段なり、二には佛の願意に約するといふが第二の問答なり、如此二の問答はやはり初の問答の答の中より出たり、特に後の問答の信樂の下に於て雜毒の善業に對して此信樂は報土の眞因となることを示すは涅槃眞因唯以信心の義を顯すといふが雲澍院の義なり、三に私の義を述せば後の問答の至心の下御自釋三紙十に曰く以如來至心廻施諸有一切煩惱惡業邪智群生海則是彰利他眞心とあり又後の問答の信樂の下御自釋四紙二十に如來悲憐苦惱群生海以無碍廣大淨信廻施諸有海是名利他眞實信心とある、又後の問答の欲生の下御自釋五紙二十に曰く然微塵海有情流轉煩惱漂沒生死海無眞實廻向心無淸淨廻向心是故如來矜哀一切苦惱群生海行菩薩行時三業所修乃至一念一刹那廻向心爲首得成就大悲心故利他眞實欲生心廻施諸有海とある、此後の問答の意は此至心信樂欲生の三信は凡夫自力の造作にあらず是全く佛の因位永却の

修行の佛力よりなりたちたる他力廻向の三信なりと彌陀大悲の本へもどし法に約して行者の三信を示したまふが後の問答の意にて西鎭等の夢にも知らざる他力廻向の今家大師の三信の所談なり、故に後の問答の中に此三信を法に約したまふは元と上の機に約する問答の答の中より出る應知後の問答も機中の法を示したまふ問答の意なり。

○答二合三所由一文分二一

- 初略二示合三ノ所由一正答ル二一
  - 初約シテ機ノ解了ニ示ス合三爲一ヲ　愚鈍衆生解了等
  - 二約シテ佛ノ願意ニ出ス合三ノ意ヲ　彌陀如來雖發三心等
- 二廣ク成ス卽一ノ義ヲ二
  - 初約シテ機ノ解了ニ顯ス合三爲一ヲ　初ノ問答ノ字訓釋
  - 二約シテ佛ノ願意ニ示ス合三ノ旨ヲ　後ノ問答

問云汝已に後の問答は前の問答の答の中より出るといふ若爾らば初の問答の所

明と後の問答の所明と同なりや異なりや、答云或は同或は異なり、今其或異の義をいはゞ後の問答の意は我等凡夫は無始已來穢惡汚染虛假諂僞にして淸淨の心なく眞實の心なきゆへ佛是をあはれみて我等が爲に淸淨眞實の至心を永刼の間修行して是を成就し此彌陀の至心のまことを我等衆生に與へたまふといふ義なり、信樂欲生も亦準じてみるべし、如此後の問答の意は其所對治の方に穢惡汚染虛假諂僞の心あるゆへ能對治の彌陀の方に此至心等の淸淨ならずといふことなく眞實ならずといふことなき等の純粹の結構なる三信を成就して此純粹の結構なる三信を衆生に與へんが爲に因位永刼なが〳〵の間積功累德難行苦行して至心は至心信樂は信樂欲生は欲生と順序をへて一つ宛こしらへたまふ其生起事實ありて此彌陀の因位永刼の御苦勞は實に言語道斷心行所滅感泣するより外なし是が後の問答の意なり、偖又初の問答の意は至心信樂欲生の三信ありといへども三十三の訓釋を以て伺へば行者が一々苦勞して先づ初に至心のまことこゝろを成就し、次に信樂の疑なきこゝろを成就し、次に淨土へ往生せんとおもふ心を成就して手間日間をついやして至心信樂欲生の三信をおこすにあらず、宿善到來してふかくかゝるあさましきいたづらものを助けたまふは彌陀他力の願力なりと一念聞名の其時に何の造作もなく何の劬勞もいらず已に彌陀の方に成就してある三信が我等の方にもらはれたがとりもなをさず疑蓋無雜の一心なり、是が初の行者の機に約する問答と後の佛邊所成の法に約する問答との異なるところなり、偖又初の問答と後の問答の同なる邊をいはゞ初の問答の意は愚鈍の衆生の往生の正因は合三爲一の疑蓋無雜の一心より外なし、問云其證何れにありや、答云御自釋六二紙十に二問答おはりて三心を總釋して信知至心信樂欲生其言雖異其意惟一何以故三心已疑蓋無雜故眞實一心是名金剛眞心是名眞實信心と結びたまふ、偖此二問答に付て廣本略本ともに第十八願の三信を合して論主の一心と判じたまふに付て廣本の方は二由二問答なり、其二由とは一は愚鈍の衆生解了し易からしめん爲に三心を合して一心としたまふといふ一由なり、又涅槃の眞因は唯以信心なるゆへ三心を合して一心としたまふといふ一由なり、

二問答とは初の問答は字訓の問答後の問答は義趣問答なり、偖略本の方は一由一問答にして一由とは愚鈍の衆生覺知し易から令ん爲のゆへにといふ一由なり一問答とは字訓問答なり、如此廣本は二由二問答、略本は一由一問答となるは廣略の所明異るがゆへなり、問云總じて廣本一部の問答を調るに今爰の信卷に二問答あり又化卷の要門下に一問答あり又眞門下に一問答ありて廣本は四問答なり又略本では念佛偈おはりて三問答あり此廣略の問答の義趣如何、答云廣本は眞實方便の卷を異にして問答するは要眞弘の三門を差別せん爲の差別門なり又略本は偈おはりて三問答を一連にするは三經一致門の法義なり、併ら廣略ともに其義は互に存してあり、偖廣本信卷の二由の中初の愚鈍の衆生解了し易から令ん爲にといふ一由は已に廣本正信偈に爲度群生彰一心とあるが初の一由の意にて是が愚鈍の衆生解了し易から令ん爲に三心を合して一心としたまふといふ意なり、又次の彌陀如來三心を發したまふと雖涅槃の眞因は唯信心を以てすといふ一由も三心を合して疑蓋無雜の一心としたまふといふ意なり、此一由の

意は論主の私にあらず本第十八願成就の經意に涅槃眞因唯以信心の義あるゆへに論主が三心を合して一心としたまふは釋迦成就の經意によりたまふといふことを知らせて成就の文の信心歡喜の信心の語をとりて唯以信心とのたまふ、是が廣本二由の意なり、次の二問答も全く前の二由を承けたまふ意にて初の字訓問答は初の一由の愚鈍の衆生解了し易から令ん爲にといふ一由を承け又次の問答は次の一由の涅槃眞因唯以信心の一由を承けたまふ、偖初の字訓問答の意は三信に三十三の字訓をなせば此三信は疑蓋無雜の一心となるといふ義なり、又後の義趣に約する問答は本願の心を闕ふに三信ありといへども疑蓋無雜の一心より外なしといふ意なり、故に此二問答の體裁をいはゞ初の字訓問答は論主の功を顯し後の義趣に約する問答は彌陀の願意を顯すといふべし已上二問答の義辯じ終る。

第五に辯二合三爲一一ノ意一とは古來此合三爲一といふに付て二義あり、一には三心各疑蓋無雜の義ありて此疑蓋無雜は一心なるゆへ言は至心信樂欲生の三なれど

も其義は疑蓋無雜の一に歸するゆへ合三爲一といふ說なり、又一義では上の義を用ひず名には各其德用ありて至心信樂欲生の三名ある已上は各其名に主どるところの義があるゆへ此三心の中に於て無疑の一心を主どるは信樂なれば此信樂に至心欲生の二を攝めて三心は唯是れ無疑の信樂の一心なりと顯したものなりといふ說なり、例せば天台に三諦一諦といへるが如く三諦といふは空假中の三なり一諦といふは前の三諦の差別を一中諦に會するをいふたものなり、今も其如く至心欲生の二を信樂に合すといへども本願に至心信樂欲生と差別したものを論主が一心に會合したまふは未だ三を合せざる已前に相對して合三爲一といふたものなりといふ說なり、問云此古來の二說何れの說を用ゆべきや、答云私に案ずるに此二說ともに各據あり、其初の義の證據は御自釋二十六紙に信知ス至心信樂欲生其言雖レ異ナリ其意惟レ一ナリ何ヲ以テノ故ニ三心已ニ疑蓋無雜ナルカ故眞實一心也とある、又後の義の證據を出さば略本十六紙に一心之中攝ニ在ス至誠廻向之二心ヲ」とある、問云一心の中に至誠廻向の二心を攝在するとあれば合二爲一にあらずや

答云今私に此難を通じて云略本の一心の中に至誠廻向の二心を攝在すとあれども合二爲一にあらずやはり合三爲一なり、其故は已に汝がいへる如く至心信樂欲生の三心の名を立るは各主どるところありて立るゆへ此三心の中に於て元とより疑蓋無雜の一心を主さどるは信樂なり、故にもとより此疑蓋無雜の一心を主さどる信樂の中へ至心と欲生の疑蓋無雜を攝すればもとより疑蓋無雜を主さどる信樂と至心と欲生の疑蓋無雜と會合するゆへ至心信樂欲生の三心を融じて疑蓋無雜の一心となれば、やはり合三爲一にして合二爲一にあらず廣略二本ともに合三爲一の名目はあれども合二爲一の名目なし、偖顯了に三信を合して一心としたまふは論主なれども前にも申す如く此合三爲一の意は成就の經意にあり、又龍樹にも合三爲一の論意あり、其ゆへは易行品の彌陀章の初に阿彌陀佛、本願如是若人念我稱名等とある文は第十八願の意にて若人とは因願の十方衆生にあたり念我の念は三信を合して一心としたまふ意、稱名とは乃至十念なり、問云此念我の念を如何が一心といふや、答云此念我の念は成就の文の一念にて

此一念を一心といふは信卷末卷に成就の一念に付て二釋ある中次の一念の體に約する釋に、言一念者信心無二一心一故曰一念一是名一心一とのたまふゆへ一念が卽一心なり然れば龍樹の念我の念は成就の一念にして卽一心といはざるをゑず、又善導此意を承けて二河喩の彌陀の招喚に汝一心正念等とある此汝は因願の十方衆生に當り一心は三信を合した一心なり正念は乃至十念なりと伺ひ奉る已上第五の合三爲一の義を辯じおはる。

第六に正講三信字訓とは之に付て預め決擇しておかねばならぬ必要の義あり、其必要の義とは至心信樂欲生の三信の中に於て信樂が肝要にして至心欲生の二心は各十九二十十八の三願にあれども信樂の一は方便の願の十九二十の二願になり眞實の願たる第十八願の至心信樂の願と三十五の女人成佛の願と三十七の人天致敬の願の三にあり、是に付て大經を撿するに此信樂の言大經の中に六ヶ處あり、一は第十八願二は第三十五の願三は第三十七の願（已上大經上卷に備樂の言三ヶ處あり）四は大經下卷の下輩段五は同流通附屬の文六は同附屬の文なり、問云此信樂の言は眞

實の所說にありて方便の所說になしとは云何、答云此大經に信樂の言六ヶ處ある中第十八願等の眞實の願にあるは此信樂の言は大必要の言なるがゆへなり、其中に於て第三十五の女人成佛の願は第十八願の別益を說く眞實の願なるゆへ信樂の言あり、偖第三十七の人天致敬の願に歡喜信樂とあるは是亦眞實の願なるがゆへなり、元と此第三十七の願の意は十方無量不可思議の諸佛世界の諸天人民が我名字を聞て五體を地に投げ稽首作禮し歡喜信樂して五念門の菩薩の行を修せん故に諸天人民が敬を致さゞるはなけんと誓ひたまふ願にして上の文の諸天人民は念佛の行者にて五體投地稽首作禮は五念門の行を修する歡喜信樂の信樂開發の行者なり、故に此願に信樂の言あるは無論なり、此五體投地稽首作禮は五念門の中の禮拜門を擧げて餘を略すこれが念佛行者の起行相續なり、問云第十八願三十五の願三十七の願に信樂の言あるは命を聽く爾るに下卷の三輩の中の下輩段は御自釋（四十二紙）等に釋したまふ如く自力の十九の願成就にあらずや此十九の願の成就に信樂の言あるは如何、答云眞要鈔末（十四紙）に此下輩の文の乃

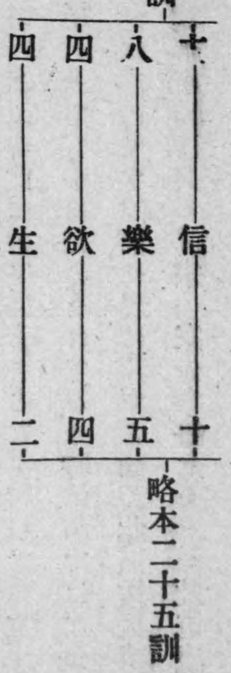
至一念を十八成就の文に合す故に此下輩の若聞深法歡喜信樂不生疑惑乃至一念の文は明に第十八願の信相を說きたまひた經文なり、問云何を以てのゆへに此義を知るや、答此文の中に若聞深法等と若の字に着眼すべし、此若の字の意は此下輩は方便の十九の願成就の文なれども若し十八願の他力至極の深法を聞て歡喜信樂して疑惑を生ぜず十八成就の文の如く乃至一念せんひとはといふ經意なり、尙ほ此大經は觀經に異りて少も隱顯なく顯眞實の經なるゆへ顯了に眞實を說きたまふ故に疑惑を生ぜずとあれば毫も疑惑なきなり、又觀經に例するに元祖の御指南の如く三輩九品は開合の異なれば九品を說く中下々品に到て隱に弘願を說きたまふといふべし、然るに大經は祖判の如く顯眞實の經なるゆへ下輩の十九の願の成就の中に若の字ありて顯了に弘願を說て若聞深法歡喜信樂し不生疑惑乃至一念と說きたまふと伺はるゝ故に此若の字と不生疑惑の文ある時は方便の十九の願成就の中に眞實の十八願成就を說きたまふと伺はざるをゑず、是が大經の所說と觀經の所說の異るところにして觀經では顯了に弘

願を說きたまはぬゆへ觀經の說相に隱顯あり、爾るに大經には要門眞門の方便を說く時は第十八の因願成就に異りて十九の願には假令の言あり又二十の願には欲生我國不果遂者の言あり、十九の願の假令の言は假に立てたまふ方便の願なるがゆへなり、又二十の願の欲生我國不果遂者の言を按ずるに三經往生文類（十三紙）に吾祖の不果遂者の御左訓に、はたしとげずはといふはついにはたんとなりと左訓したまふ、爾るに第十八成就の文にはついにはたんといふ如き漸々轉進の經說なく臨終をまたず聞其名號信心歡喜の一念に速に卽得往生住不退轉の大益を與へたまふ頓極頓速圓融圓滿の金言なり、應知方便の願と眞實の願の得益の差別あることを、問云大經に三輩を說く中何故上中二輩に弘願を說ずして下輩に至りて若聞深法不生疑惑と弘願の說相ありや、答云觀經の說相には隱顯ありて顯說には少も弘願は說きたまはねども隱顯には經の始め序分の如是我聞より正宗の終りにいたる迄弘願を說きたまふ、中に於て觀經の九品の中上六品には六字名號を說きたまはず下三品に到て初て稱南無阿彌陀佛の尊號を說き

たまふ、此名號たるや顯には散善隨一の自力の念佛なれども隱には弘願他力の念佛なり、今此大經の上中下の三輩の中下輩は觀經の下三品に相當してあるゆへ大經にも深法と說き亦不生疑惑の言を置きて要眞にあらざる弘願の意を示したまふ經意なり、卽是れ大經の下輩と觀經の下三品と相當する說相なり、問云大經の下輩と觀經の下三品と相當することは云何、答云之に付て古來より輩品會合の論目を立てゝ討究する今之を辯ずるに遑なし、已上三信の字訓を講ずるに付て預め必要の義を辯じ終る。

今正く三信の三十三訓の祖釋を辯ずるに此三信の字訓の中至心に五訓信樂に二十訓欲生に八訓ありて合して三十三訓となる、略本では至心に四訓信樂に十五訓欲生に六訓ありて合して二十五訓なり。

○廣略二本三信字訓之圖



此至心の至に付て廣本では眞也實也誠也の三訓あり、此至心の至の字訓の眞實誠の三訓は亦信樂の字訓の信の字にもありて此眞實誠の三字ともにまことゝ訓ずれども各其まことの字義が違ふ、先づ眞の字のまことは眞とは假に對する言にて世上でも是は僞物なり是はにせものなりといふ之に反して之はにせものにあらず之はほんまものなりといふ、今爰に至とは眞也とのたまふは僞物の至にあらずにせものゝ至にあらず此至心の至はまことの至なるゆへ至とは眞也と訓じたまふ、又實也とあるは此實といふ文字の義は同じまことゝいふ文字なれども此實の字のまことは虛に對するまことなり、虛とは俗にいふからのことなり故に此實とは此力らに對したものゝ實といふことにて大經上卷に黃金爲實磚礫

爲實とあるは黃金を實とすといふ經文なり農夫が秋になりて稻を刈り入れた時實のなきもみをみよさといふてすて、實のあるもみをとるが如し、又誠也とは此誠の字は會意の文字にして言篇に成の字の旁を書く此言篇の言は言說にて言にあらはしてものをいふことなり、又此成は成ずるといふことにてゞきあがることを成就といふ、故に此誠の字のまことはいふたことをまちがはさず成ずるといふ文字なり、例せば甲の人と乙の人と明日は上京いたそふと約したゆへ甲の人が乙の人に同行を促せば乙の人が同行せぬ時は昨日約した言を成せぬゆへ誠ではなきなり、佛はこれを心ろ各異と誡めたまふ、又御一代記聞書三紙におもひうちにあればいろほかにあらはるとありされば信をえたるひとは口もこゝろもひとつなりとのたまふが此誠の字のまことなり、口では立派にたのみまふして候と御懺悔を申し上ても心にたのまれてなき時は誠ではなひ、今爰に至とは誠也と訓じたまふは之に反す、前に已に辯ずる如く此三信は或は法に約し或は機に約して釋するが西鎭に異る眞宗一家の綱格なり、今此眞實誠の三字を法に

約して辯ぜば大經正宗分に七段ある中第二の勝行段の經文に不可思議兆載永劫に法藏菩薩が無量の德行を積植して不生欲覺嗔覺害覺不起欲想嗔想害想と三覺三想を生ぜずおこさず修行をして虛僞諂曲の心あることなき彌陀永劫の修行の相がこの眞也實也といふ、法に約する吾祖の訓釋なることは前に辯ずる如く吾祖の御自註に明なり、偖誠也といふ訓を法に約せば大經七科の第一の勝因段の經文に於是法藏比丘具足修滿如是大願誠諦不虛と說く、此意は已に大經勝因段の經文に法藏が四十八願を說て世自在王佛に申し上させられる時、佛告比丘汝今可說とありて世王が法藏比丘に對して汝の所願の如く大衆の前に於て之を說き聞せて一切大衆を發起し悅可せしめよ、爾る時は外の菩薩も汝が所願を聞てこれを緣として無量の大願を滿足するであろふと仰せられた時、法藏比丘が世王佛に上白して左樣なれば何卒聽てくだされ我が所願の如く具に說くべしとのたまひて夫より拔苦與樂攝諸衆生種々別益の六八大願を言にあらはして說きのべたまふが四十八願の說相なり、其時六種に震動して天より妙華を雨らし自然

に音樂ありて空中より法身如來が法藏の所願を讃嘆して汝の所願の如く決定して必ず無上正覺を成就すべしと證誠したまふ、其次の文に於是法藏比丘具足修滿如是大願誠諦不虛とある此誠諦の誠の文字が法に約したまことゝいふ大切な文字にして上來說き顯した四十八の大願は法藏菩薩が言を以て說きのべたまひたゆへ其言の通り誠諦にして虛しからず四十八願を言に說きた通りに屹度成就したまふべしとあるが此法に約する誠の字の訓の意なり、此法に約する眞也實也誠也の訓は實に難有金言なり、已上法に約して眞實誠の三訓を辯じ終る。

偖此眞實誠の三訓を機に約して辯ぜば前に已に辯ずる如く彌陀因位にまことのこゝろを成就し衆生に廻向したまふゆへ其與へてもろふたまことが約機のまことなり、故に最要鈔の初にこの信心をまことのこゝろとよむうへは凡夫の迷心にあらずまたく佛心なりこの佛心を凡夫にさづけたまふとき信心といはるゝなりとのたまふ、蓮師の御文にこれを相承したまふ、又御文にたすけましませとおもふこゝろの一念の信まことなればとある此まことゝいふが機に約するまことなり、又香嚴院略本發硎に彌陀の功德を成ずる能成の心が至心なりこれが衆生の至心となるとありて至心を機に約し法に約して釋してある中今はこれが衆生の至心となるといふ機に約するところなり、又五乘院正信偈講義に眞也とは迷の衆生に眞實のあるべき筈なしこれは全く如來の眞實心中になしたまひしを用るゆへ眞也といふとある、此衆生が用ひたが機に約することなり、偖此誠の字のまことの意を御一代記聞書三紙に一念聲是一といふこと乃至おもひうちにあればいろほかにあらはるとありされば信をえたる體はすなはち南無阿彌陀佛なりとこゝろうれば口もこゝろもひとつなりとある、此文の中に口もといふが誠の字のこゝろにて口には立派に諸の雜行雜修自力のこゝろをふりすてゝ一心に阿彌陀如來われらが今度の一大事の後生御たすけ候へとたのみ申して候と口でいふても心にたのまれてなかりたならば口と心と相違して口にのべた御懺悔の通りになりてなきゆへ誠の字のまことではなひ、口にのべた通りに心に領解が出來てあればこそ口もこゝろもひとつなりとのたまふ、今此誠也とあるも其通

りにて口にのべた通りを成就したいつはりなきまことなり、偖此至心の至にもまことの義あり、又信樂の信の字にもまことの義ある中此至心の至のまことゝ信樂の信のまことの差別は香月院廣本の講義に至心の眞實の訓は虛僞のなきまことなり又信樂の信の眞實の訓は二心なきまことなりとまふされたは此至心と信樂のまことをよく分別せられたる釋なり、已上眞實誠の三訓を機に約して辯じ終る。

偖心者卽是種也實也といふに付て古來確とした說はなけれども古來の說を潤色して辯ぜば此種也實也の二訓の意は先づ光遠院略本叢林解に此心の字はたねとよむたねになるも心といふなりとあり、又理綱院略本伊蒿記には心者種也實也といふに付て月筌の第八種子の義を簡び蹄涔の子實の義をとられたり、又皆往院廣本報恩記にも蹄涔の義を用て種はおのづから實の義あり草木の子實の如し今此至心は至德の尊號を體とすたとへば種實をよく衆生の田地に下すがゆへにと申されたり、又五乘院正信偈講錄に心者種也とは心の字の字義に轉じて實の

字のかはりとなさるゝなり其ゆへは信樂欲生に心の字なし三心の結釋に信樂は至心を體とす等と送りこんで三信體一の義を示すといふ、又開悟院廣本講義には梵語に紇利陀耶といふ此に心といふとある私云吾祖信卷末に此心といふに付て諸宗に異論あるゆへ止觀を引て質多者天竺音此方云心心者卽慮知也とのたまひて紇利陀耶等の諸心を簡び分別慮知の質多心をとりたまふ、爾るに今開悟院が此紇利陀耶心をとられたは不可なり已上先輩の說を出し畢ぬ、次に私に先輩の說を潤色して此心とは種也實也とある祖訓を伺へば心者種也とは月院はこれは心の字を義を以て訓じたまふ義訓なり、これは玄義分によりたまふとまふされたり、此玄義分とは（二十一紙）の意にて此意はもと淨土論の二乘種不生の種とある種の字を善導は心也と訓ず、此意は淨土論の大義門功德の中に二乘種不生とあるは聲聞緣覺の二乘は彌陀の淨土へ生れられぬといふことにはあらず彌陀の淨土は諸佛の淨土とは違ふて其土德が勝れてありて果相平等の大乘善根界なるゆへ此界では二乘でも淨土に往生すれば平等一味の證となりて

二乘の種は生ぜぬといふ釋なり、敢て聲聞緣覺の二乘が彌陀の淨土へ往生が出來ぬといふことではなひと會釋したまふ、此會釋は鸞師より御相承にて論註上下八に出す、今吾祖は此善導を用て心とは種也と訓じたまふなり、問云上に已に至心の至の字にも實也とあり、今亦この至心の心の字にも實也とある、此兩處の實也の訓は同なりや異なりや、答云如此兩處に實也の訓を出したまふは各其義に差別するところあるゆへ兩處に出したまふなるべし、今私に此兩處の實也の訓を伺ふに先づ至心の至に實也とある意は此實といふは虛に對する實にして虛とはからのことでまことのなきことなり、其まことのなき虛に對する實なるゆへ眞也誠也と一組になりて此至の字の實といふは力らでなきまことのことなり、又心の字の訓に實也といふは光遠院の辯に此心の字はたねとよむと申されたり、又月院も心の字を種也といふは義訓なり又實也といふは轉訓にて子實の義なりと申されたり、此子實の義といふは同じ實は實のことなれども上の至心の至の下の實也といふは力らでなひみのあるまことのこと、此心の字の下の實

也とある實は光遠院の申されたる如くたねとよみて物のたねのことなり、此物のたねは屹度芽を生じてつゐに枝葉を發す、今此下に心を種也と訓じ夫が一轉して實也とあるは上の至の字訓に實也とあることは違ふて物のたね子實のことにて此たねよりは芽を生じ枝葉を發するゆへ實也と訓じたまふ、何ゆへ心の字にたねの義出るなれば字書にも心は物のたねとなる義あり、又佛法には無論心は一切諸法の因となることは恒の所談にて六十華嚴十一紙に心如巧畫師畫種々五陰世界中無法不造とある故に今も心を種也と訓じ夫が一轉してものゝみは芽を生じ枝葉を生ずる如く、此至心の心も種の實となりて大般涅槃の妙果を生ずるなりといふ御意にて心者卽是種也實也と訓じたまふなるべしと私に伺ひ奉る已上、至心の五訓辯じ畢る。

言信樂者信者等信樂の信に付て十二訓ある中眞實誠の三訓の意は已に至心の下に於て辯じた如く至心の下も信樂の下も亦機に約し法に約するの義門異りといへども其字義は同じことなり、偖此至心の下の眞實誠のまことゝ信樂の下の眞

實誠のまことの別をいはゞ至心の眞實誠はうそいつはりなきまことなり、又信樂の眞實誠は二心なきまことなりとしるべし。

偖滿也とは理綱院略本伊蒿記に云滿は充實の義とあり、又月院廣本講義云滿とは實の字の轉訓なりとある、圓乘院廣本講義には滿とは滿足にてまことの滿足したることなりとあり、開悟院廣本講義では滿也の訓は孫訓也信は實也と訓じて其實の字に滿也の訓ありよて孫をつれ來りたのなりとあり、私云これらの先輩の說をうけて今私の義を加へて此滿也の訓を辯ずるに月院の申さるゝ如く實の字の轉訓なり、又開悟院の申さるゝ如く孫訓といふても爾り、偖此滿はみつるとよむ文字にて此みつるといふに付て私に伺ふに二の義あり、一には此みつるといふは法の方より機の方へみつる義にて正像末和讃に選擇本願信ずれば不可稱不可說不可思議の功德は行者の身にみてりとあり、又同述懷和讃に無慚無愧のこの身にてまことのこゝろはなけれども彌陀廻向のみなれば功德は十方にみちたまふとあり、又一多證文三紙二十に滿はみつといふ足はたりぬといふ功德

とまふすは名號なり大寶海はよろづの善根功德みちきはまるを海にたとへたまふこの功德をよく信ずるひとのこゝろのうちにすみやかにとくみちたりぬとしらしめんとなりしかれば金剛心のひとはしらずもとめざるに功德の大寶海そのみにみちみつるがゆへに大寶海にたとへたるなりとある、別して此文の中に信ずるひとのこゝろのうちにすみやかにとくみちたりとあれば此一多證文の御釋がよく爰の信の字の下の滿也の訓によく合するなり、此義は法の方より機の方へみつる義なり、二には信の當體に滿の義あり、其ゆへは世上に於てもあの人なればと其人を信ずれば其人の申されることに不足はいはぬ故に信じたところに滿足したおもひがなければならぬ其人のいはれることを信ぜぬなれば滿足はせぬ又信じたけれとも滿足はせぬといふ道理なし信ずれば必ず滿足するは無論なり、今も爾りたのめたすけふの彌陀の仰を信じてみれば阿彌陀如來の仰に腹がふくれて滿足する世間でも充分腹がふくれてなき時はつまみぐひが仕度きなり充分腹がふくれてあればつまみぐひする機はおこらぬ、今も爾り阿彌陀如來

の御慈悲に充分腹がふくれてみれば餘神餘佛のつまみぐひする機はおこらぬなり、餘神餘佛のつまみぐひをしたひのは未だ阿彌陀如來の御慈悲に腹がふくれてなきゆへなり、故に信じてみれば屹度滿足するゆへ月院は此滿也といふは信の字の轉訓なりと申されたは此ことにてあるべし、之は信ずるのが一轉して滿るといふ義になる故に吾祖は信の字に滿なりと付けたまふなるべしと私に伺ひ奉る、是れは行者能信の當體にある滿の字の義なり。

極也とは極成の義にして月院の廣本講義に云因明に極成不極成といふがありて極成とは疑はず信ずることなりとある、今此辯を委くせば因明の作法に極成の有法極成の能別といふことがありてこれは敵者が信用して共許するを極成といふ、此極成とは至極し成就してあるものゝことなり、若し敵者が信用せぬを不極成といふ今此信樂の信に極成の訓あるは本願名號の由れをきゝひらきて少も疑はず御尤も至極で御座りますること信ずることなり。

成也とは樂邦文類三十一に誠とは成也とありて言の通りに成就していふたことをしとげることにて本願名號の由れを聞て疑ひをのこさぬことなり、圓乘院廣本講義には極成とは佛になるべき理が極成したことなりといはれども爰の極成といふは左樣なことではなひ、月院が申された如く之は行者の能信にて行者が信ずることなり。

用也とは光遠院略本叢林解に云用とは須也で信心は用ゆることゝいふ、又理綱院略本伊蒿記には用は力用なりといふ、月院は廣本講義に信用なりとある、又開悟院は廣本講義に用とは信用することで善導の釋に眞實心中になしたまひしをもちひよとある如來の眞實心中になすとは南無阿彌陀佛の名號なり此名號を深く信ずるが用るといふものなりとある、私に云光遠院が用は須也といふことにて信心はもちゆることゝ申されたは開悟院の申される如く散善義至誠心の釋の下に眞實心中になしたまひしをもちひよとある意なり、又理綱院の如く用は力用と申されたは信の下の訓には合せぬ、光遠院香月院開悟院の申さるゝ如く散善義の須の文點は用の文點で解されたは尤なる說なり、已に散善義に深く佛

語を信じて菩薩等の不相應の教を信用すべからずとあるよりみれば此信の字に用なりとあるは彌陀の本願を信用したことなり。

重也とは月院は廣本講義に敬重也といふ、開悟院廣本講義には見敬得大慶とありて敬はうやまひ尊重することなり、下に御引用の華嚴經にも信は恭敬の本也とある、和讃にも恭敬の心に執持してとあり、最要鈔に本願の道理をきゝて謙敬すれば等とありて吾身は現に罪惡生死の凡夫出離の縁あることなしと我身をへりくだり此機を助けたまふ彌陀の本願なりと敬信して尊重する其義をあらはして重也といふ、爾れば南無とたのむ衆生を阿彌陀佛の助けたまふといふ道理をきゝて我身を謙て佛を尊重するこゝろなり故に信の字に重也の訓を出したまふ。

審也とは光遠院略本叢林解には審はあきらかといふことなりとあり、月院廣本講義には審は審決の義にしてはつきりとして疑をやぶることなりといふ、開悟院は廣本講義に審は諦也あきらかなことなりといふ、私に云分らぬことを不審

といふ之に反して審也といふはあきらかにはつきりと分りて疑の少もなきことゆへこれが信じた相なり。

驗也とは光遠院略本叢林解云驗はしるしにて明なことを信知する合點がゆかねどもそれはそふよといふなれば明かではなひ、又月院廣本講義では驗也とは之に違ひなひと考へあきらむることゝいふ、開悟院は廣本講義に驗とは證也といふてあきらかなことゝいふ、光遠院等の諸師の義なり、偖上來の用重審驗の四訓に付て有師の考へに用也とは力用の義にあらず信用の義なり、重也とは敬重尊重の義なり、此用重の二訓の意をいはゞ其人の教を信じ用る時は必ず其人の仰せを尊重敬重する義あるべきなりいやながら用るのなれば眞に用るにあらず信じて用るゆへ尊重の義あり、偖此用重審驗の四訓の據を字書に求められたはつとめたりといふべし併ら此用重審驗の四訓が相承の聖教にありといふことを古來知れぬといふて序分十紙幷に十一の文意をとりて辯ぜられたり、其意は觀經の序分に隨順調達惡友之教とあるはこれは惡人の闍王が惡人の提婆の教に隨順

して教の如く惡を作ることが說てある、時に善惡の差別は天地のかはりはあれども今日の行者が善知識の教に隨順して教の如く信ずる手前は更にかはることなし、善の教に隨ふも惡の教に順ふも其教にこそ善惡はあれ隨順するは同じことなり、卽序分義に閻王が提婆の教に隨順することが說てありて提婆が閻王を手に入れんとおもふて惡計をめくらして阿難になろふた奇術をみせたゆへ閻王が大に提婆を尊重して提婆の教を用るなりこれが卽用重の二訓の據なり、卽序分義紙十右に敬重とあり又紙十一左に信用とある。

偖驗也宣也とは提婆が惡計を以て頻王と閻王の父子の間をへだてん爲に昔の太子誕生の事緣を說きて實は父王は太子をころさん爲に如此の事實ありと說きて夫が虛なれば君の小指をみて驗しとすべしと申した、卽序分義紙十一左に此驗の字出る故に此驗といふ文字はしるしといふ文字にてこれに上こす驗の證據はあるまひといふところに驗の字あり、これが今信を驗也と訓じたまふ據なり、如此閻王の小指のきれた驗をみせてすゝめた時閻王が此すゝめの語を聞て更に重

ねて審言してとある此審の字はあきらめてとよみてもつまびらかにしてとよみても可也、不分明なることを不審といふ慥なることを審といふ故に此審を審實不虛ともいふたしかにつまびらかにあきらかに信ずることなり、故に閻王が審にして實に爾るやと問た時提婆が答へて若し之かうそなれば滅多しやべりはせぬといふ此語によりて閻王が提婆の教を信ずる、これを觀經に隨順調達惡友之教と說く故に此序分義に用重審驗の四訓の文字が出でゝある、所信能信の善惡の差別は黑白の差別あれども信ずる手前は同じことなり、此用重審驗の信ずる相を安心にかけて辯ぜば信也の訓ありて此行卷の命の字に信也の訓あるは如來よりのおとずれの義なるゆへ吾祖になひではなけれども今此信樂の信にあるべき筈なし、これは信と宣とは同音訓の例と考へたがよきなり、これは全體此信は去聲といふが定りなれども古今韻會二十三十六紙に信は又平聲にして眞の韻の中の伸と通用するなり、又宣は先の韻なりこれは同音假借の例として訓を出したまふは無理に似たれども上に誠は成也の同音假借を用ひたまふゆへ亦この信宣

も同音なるゆへ信は宣也といふ時は信が宣の義となりて宣明の義を顯はす、廣韻禮部韻に宣布也明也の註ありてどこからどこまでものべしくといふ意より明也の義あり、上の驗の義に同く明信佛智の義を顯したまふと月院は申されたり又開悟院廣本講義に云宣の字に用也の訓あり爾れば信は用なれば用は宣なるゆへ宣に通ずそこで信は宣也と註す又宣は布也明也どこからどこまでも明なこと布はそこらあたりに布くこと丶申されたり、私に月院の義を評ずるに信と宣と同音訓とはいひがたし信は平聲の十一眞の韻の中の伸に通ずれども宣は一先の韻なり、誠と成とは同音なるは無論なるゆへよけれども宣と先と通音といふは難分、爰に有師の妙說あり今其義を出さば信に宣の訓あるは古來知れ難しこれを轉訓として推し付て通る、これは轉訓に違ひはなけれども此宣をあきらむるといふ義に辯じたる者のみなり、何にもあきらむるはあきらかと訓ずるより出ることなれども宣の御左訓にはあきらむるとはなひ、あきらむるとは驗の字の訓にて事足れり爾るに此宣の字の御左訓にのぶると付けたまふは之は本朝に

於て人の名乘の時信の字をのぶと訓ず、佐藤次信織田信長源頼信何れも信をのぶと訓ずこれは信より出たる宣なるゆへ宣の字にのぶと付けたまふ、偖信をのがのぶるといふものなり、口にて宣說しのぶることにはあらず、左傳の杜柱隱公より哀公迄の謚法の中に聞てよく達すを宣といふとあり、これは賢人君子の道を聞てよく達するといふは聞く通りによく通達するが宣なり故に宣公宣王宣帝とあるも皆爾り、今此宣也の訓を安心にかけて辯ぜば大經に可得智慧明達とありて信心の智慧にて疑のふさがりとゞこふりなくたのめ助けふの仰によく通達して願もいらず行もいらず罪や障はいかほどあろふとも我れにまかせよとある阿彌陀如來の仰によく通達するが卽のぶるといふものなりと辯じてある、此師の說は古今未發の妙義なりと存ぜられるなり。

忠也とは月院廣本講義に心底より二心なきは疑はぬことなりといふ、又開悟院御本書講義に云忠也とは上の信の字に實也誠也の訓あり、信は實誠なれば忠也

の義が出ねばならぬ忠は忠實と熟して君につかへて實をつくすを忠といふ、其實といふは主人につかへて二心なきこと二心なければ疑ひなきなり、爾れば忠也とは實也誠也より出たる孫訓なりとあり、私云此忠の字はまめやかと訓じて二心なき忠實なることで君につかへて忠を盡す二心なきより出る御自釋二十九紙に言一念者信心無二心故曰一念是名一心とありて疑の二心なく信じた相が忠なり、御文に一心一向を釋して一心一向といふは阿彌陀佛におひて二佛をならべざるこゝろなりされば外典のことばにいはく忠信は二君につかへず貞女は二夫をならべずといへりとのたまふは此信の字に忠也と訓じたまふに依りたまふなるべし。

樂者卽是欲也等とは月院廣本講義云願也とは欲の訓に願也願の註に欲也とあるゆへ轉訓を以て樂とは欲也とつけたまふ、樂の音の時は廣韻幷に禮部韻に好の訓あれども今は之を出したまはず願也の訓を出したまふは必用の義あるがゆへなり、其必用の義とは樂はねがふといふ義が必用なりとあり、又愛也とは如來

會の歡喜愛樂にして樂に愛樂の義あるゆへ之を出す、又悅也歡也とは樂の字にもと樂のたのしむ義あり劉熙釋名に喜怒愛樂の樂の字に樂は樂也とありて樂は人のねがふべきものゆへ樂に樂の義あり、偖此悅歡喜の訓を出したまふは上の引文に成就の文に因願の信樂の樂の字を歡喜とし如來會には具に歡喜愛樂と說く爾れば因願を成就に對暎するに樂といふはたゞねがふことではなひよろこびねがふ意なり、爾れば歡喜の義は又身心悅豫の義あるゆへ悅の訓あり、爾れば此三訓はなければならぬ訓なり、賀也慶也の訓は歡喜の二字より轉出するなりこれは字書になき義訓なり、見敬得大慶又慶所聞とあるによりたまふと申されたり、問云此樂の字に欲也願也愛也等とある意は如何、答云此樂の字の訓に欲也願也愛也等とある訓に付て異義を骨張する人多し、其一を出さば前年此樂の字訓の欲也願也とあるをとりて蓮師のたすけたまへは此訓によりたまふと申されたる人がありたゆへ段々說諭を致したればつゐに此義を改められたり、月院の申されたる通り愛歡喜の訓は如來會の歡喜愛樂の文によりたまふとあり、此歡

喜愛樂の文に付て目今曾て御相承の御釋になき義を立る者あり尙ほ御相承の釋に曾てなきのみならず八代目中興の御文の安心のかゞみに背く妄說を吐く、其妄說とは有人の著はされたる本願成就文法話二十五紙に云吾祖が歡喜愛樂を以て眞實心中に豫て無上涅槃の期して待つべきことを御示しあそばされたを蓮師是を假名書きにしてたすけたまへとたのむであると敎へて他力の信心を本と勸むる眞宗を中興くだされたと書てある、爾も此文の中歡喜愛樂とたすけたまへとあるところに二重圈點をつけある、此二重圈點をつけるこゝろは我れは此通りに信認して居るゆへ外の人も我が信認しておる通りに信認せよといふ意がある、而も此二重の圈點を付て到底此說は動かぬ說なりと人に知らせん意なり、今此大妄說を斥せんとするに初に本宗相承の正說を擧れば蓮師の御文并に御一代記聞書の聖敎の明判也、其明判とは先づ御文の中にたすけたまへの御言二十九ヶ處あり此二十九ヶ處の中七ヶ處には或は南無をたすけたまへと釋し、或は歸命をたすけたまへと釋したまふ、今其七ヶ處の文を出さば御文三帖目第二通に云

まづ南無といふ二字はいかなるこゝろぞといへばやうもなく彌陀を一心一向にたのみたてまつりて後生たすけたまへとふたごゝろなく信じまいらするこゝろをすなはち南無とはまうすなりとあり、又同第五通に云この南無といふ二字は衆生の阿彌陀佛を一心一向にたのみたてまつりてたすけたまへとおもひて餘念なきこゝろを歸命とはいふなりとあり、又同第六通に云まづ南無といふ二字は歸命と乃至たすけたまへとおもふ歸命の一念おこるときとあり、又四帖目第十四通云歸命といふは阿彌陀佛後生たすけたまへとたのみたてまつるこゝろなりとあり、又五帖目第八通に云南無の二字は衆生の彌陀如來にむかひたてまつりて後生たすけたまへとまふすこゝろなるべしとあり、又同第九通云南無の二字は歸命のこゝろなり歸命といふは衆生のもろ〳〵の雜行をすてゝ阿彌陀佛後生たすけたまへと一向にたのみたてまつるこゝろなるべしとあり、又同第十三通云それ歸命といふはすなはちたすけたまへとまふすこゝろなりとのたまふ、又御一代記聞書四紙に云南無といふは歸命このこゝろは御たすけさふらへとたのむな

りとのたまふ、御文二十九ヶ處たすけたまへの御化導ある中七ヶ處は正く南無歸命にあてゝたすけたまへの御化導なり、殘り二十二ヶ處のたすけたまへの御化導も南無歸命の御化導なりといはざるをえず、此外御一代記聞書等にたすけたまへとあるも南無歸命の意なりとしるべし、他宗他流はいざ知らず苟も淨土眞宗の流れを挹んもの誰れか此蓮師の御化導に背きて自義を設けんや、此蓮師の南無歸命のたすけたまへの御化導は大虛空に日輪を懸るが如し此明かなる御化導を無視して自義を立るは眞宗の末徒にはあらざるべし。

偖此信樂の樂の字の欲也願也に付て今私の義を出さば因願の信樂の中成就には信樂の信を信心と說き樂の字を歡喜と說く異譯では委く歡喜愛樂と說きたまふ此欲也願也等の意は信ずる當相にそなはる意にて本願名號の由れを信ずるがゆへに無理にいのり出しくどき出して願にあらず、若し人ありて千金をやるゆへうけとれといふた時其言を信じてみればいや〳〵うけとるにあらずうれしく歡喜愛樂して而も其金くだされの願はあるなり、故に向ふの仰を信じてみれば其

信じた當相に喜び願ふこゝろがあるゆへ欲也願也と訓じたまふ、其證據は大經の別序に佛より勅して汝が爲に說んとある佛勅を聞て阿難はうれしく難有喜び〳〵願ふたが願樂欲聞なり、又吾祖が入西房に我眞影を寫さんとおもはゞ定禪法橋にうつさしむべしとのたまふた時、入西房は其觀察の旨を隨喜してとある此隨喜のよろこびは眞影をうつしたひとおもふ願ひに具る喜びにて疑ひなく信じて其仰を愛樂する欲願なり、此欲は散善義の爲二趣求一ある相なり、願々鈔のおはりにまことしき願樂欲求の心のおこること佛願難思の發起にあらずばさらに納得すべからざることいふにあたはざるものなりとのたまふところなり、偖淨土論には衆生所願樂とありて此願樂を論註では志願といふ、之を御文に俗語に隨へてまふすとのたまふ、此まふすは御傳鈔に申し預り圖畫し奉るとあるも願ひごとなり、本朝文粹に左大臣を申す又なに〳〵の官職を申すの表とあるも皆願ひごとなり、人に向ふて申し〳〵といふ又七條新地あたりにて娼妓が申し〳〵といふも何卒這入りて遊びくたされといふ願ひごとなり、又願ふて出來た

る子を申し子といふ、願ふて讀でもろふた御經を申し經といふ、御脇係を申す御本尊を申す又御本山より申しものがさがる等とあるは皆願ふことなり、併ら今爰の信樂にそなはる願ひは自力の願ひにあらず佛智他力の信心にそなはる願ひなり、偖此欲願といふは世間に擬していはゞこゝろにほりすることにてほりするとは求ることなり、妻を求る坊主をいもほり坊主といふ金をほしがる坊主を金ほり坊主といふ、偖いもほりのいもは妻のことにて夫妻のことをいもせといふ故にほりとはほしがることにてほりするを轉じてほしがるといふ、之を欲するといふ、今爰に樂の字に欲也願也とあるは信ずる當相に本願をほりし意があるこれが先に引く願々鈔の願樂欲求の心なり、偖愛悅歡喜賀慶の六訓はともによろこぶ義なり、信樂の成就を信心歡喜と說き如來會には歡喜愛樂と說くゆへ歡也喜也愛也の三訓を出したまふ、又大經の三十行偈には得大慶とあるゆへ讃彌陀偈に信心歡喜慶所聞とある之を二河のたとへに慶喜とあるをとりて讃彌陀偈和讃に所聞を慶喜せんとのたまふ此慶喜は信心に具はるよろこびなり、又

正信偈には一念喜愛心又慶喜一念とのたまひ和讃には一念慶喜とも一念歡喜とものたまふ、今爰の樂の訓に欲也願也とはあれども祈也禱也とはなひ、偖又此愛といふは妻子等を愛する貪愛にあらず、偖此歡喜のよろこびはうべきことをえてんずとかねてさきよりよろこぶこゝろなりとありて未だ成佛はせねども滅度の當得をよろこぶよろこびなり、又賀慶のよろこびは同じよろこぶことなれども事すみたるよろこびにて現生正定聚をよろこぶよろこびなり、偖此賀の字の貝はたからと訓ず、此こゝろは元と此たからといふは眞珠などの貝より出たのゆへ貝をたからとよむ故にたからといふは多く貝に從へてありて寶の字財の字貨の字等の如し、故にたからに乏しければ人がおとしめるゆへ貶の字が出來た、賀とはたからを加へるといふ會意の文字にて堂班昇進又婚禮等のよろこびには五拾錢でも送るを賀といふ、之はよろこびのすんだ上に賀するといふものなり、今も爾り已に信の一念に正定聚の位に住したゆへ歡喜は已得を喜ぶことなり、偖慶の字は鹿に从べてあるはもと漢土にて人を賀するに鹿の皮を用ゆる

ゆへ此慶の字あり、有師の廣本講義に欲也願也とは往生成佛を樂欲することなりたゞ極樂を願ふにあらず彌陀と同じき佛にならんことを欲願する信心なるゆへに信樂が卽願作佛心淨土の大菩提心なりといへり、今私に此義を評して云此義は此信樂の樂の字訓の欲願の意は此衆生が彌陀と同じき佛にならんといふこゝろにて願作佛心大菩提心なりといへりヶ樣なところを委く研究するが宗乘の學問なり、其ゆへは此願作佛心度衆生心は直に我等の愚人のこゝろにおこされるものにあらず、もと聖道所談の願作佛心度衆生心は上求菩提下化衆生の大菩提心にして其おこしがたきは三千世界を擧るよりも重し故に心も言も及ばれぬが聖道門の菩提心なり、此聖道の大菩提心は利他をおもとするがゆへに大寶積經八十八紙十五に此大菩提心は三界六道の衆生をして解脫令むとありてとてもわれらがおこされるものにあらざるゆへ此三信の字訓に出したまふべきものにあらず、故に此願作度生は他力信心の具德にして今日我等の愚夫愚婦が大菩提心をおこして先づ第一にあらゆる衆生を濟度せずんばあるべからず又無量刼をへ

めぐりて修行をして佛にならねばおかぬといふ樣な高尙なこゝろがおこされよふ道理なし、問云若爾れば吾淨土眞宗にも已に天親和讃幷に正像末和讃に數々願作佛心度衆生心とのたまふは如何、答云此淨土眞宗の願作度生は聖道の所談に異りて前にも申す如く他力信心の具德なり、其證據は天親讃に盡十方の無碍光佛一心に歸命するをこそ天親論主のみことには願作佛心とのべたまふ、又次の和讃に願作佛の心はこれ度衆生のこゝろなり度衆生の心はこれ利他眞實の信心なりとありて上の和讃の意は今日我等の愚夫愚婦が上求菩提下化衆生の高尙の心をおこすにあらず盡十方無碍光佛に一心に歸命するが卽願作佛心なりと天親菩薩はのたまふぞよと知らせたまふが此和讃の意なり、又次の和讃の意は願作佛の心はこれ度衆生のこゝろなり此度衆生の心は別に外に下化衆生の心をおこすのではなひ利他眞實の信心なりとのたまふ、又正像末和讃にも淨土の大菩提心は願作佛心をすゝめしむすなはち願作佛心は度衆生心となづけたりとあり次の和讃にも度衆生心といふことは彌陀智願の廻向なり廻向の信樂うるひとは

大般涅槃をさとるなりとありこれをもろふたが願作佛心度衆生心なり、今日おろかな我人願作佛心度衆生心の名をだに知らぬものが此高尙なこゝろのおこされよふ道理はなけれども彌陀廻向の信樂をうる時は自然と自信教人信の德ありて上求菩提下化衆生の道理がそなはりて利益有情はきはもなしと讃じたまふ意なり、應知我こゝろに大菩提心をおこして無上菩提誓願證とたとひ無量刼を歷めぐりて此願行を成就して作佛せねばおかぬといひ又衆生無邊誓願度と無邊の衆生を濟度せねばおかぬといふ樣なこゝろはおこさねども成佛するには大必用にしてなければならぬ願作度生のこゝろは彌陀の方より賞ひうけた他力の信心に自ら具はる信心の具德なりと伺はねばならぬ、故に此有師の義は一寸おもしろそふな說なれども私には此說は用ひがたし已上信樂の二十訓終る。

言欲生者欲者願也樂也とは月院廣本講義に云上の信樂の樂に欲願の義あり今亦此欲生の欲にも願樂ありてともにねがふ義なれども其願ふこゝろがちがふ、信樂の樂は所信の本願名號をやれうれしやありがたやとよろこぶ歡喜愛樂のねが

ひなり、又欲生の願樂は極樂へ生れたひとねがふことなり、卽本願の由れに疑ひはれてよろこびの上に極樂へ生れたひとねがふ、爾れば願ふ義は異れどもそれを一にして論主は願生安樂は歸命の意なりとのたまふ故に三信を合して一心とするときは信樂の意に結歸するなり、圓乘院廣本講義云願樂とは希望なり、覺知とは希望の相なりとある、又皆往院廣本報恩記には信樂の樂は信が同時の果にして卽本願を樂欲す欲生は往生を樂欲すといふ、私云初に願也とは欲は欲願希求の義にて因願の欲生を成就に願生と說く故に欲は願なりと訓ずれば願は願樂にて上の信樂の樂を開きたる欲生することを顯はし此欲生を上の信樂の樂におさめることを示して願也の訓を初に置きたまふ、樂也とは三十行偈に聞法樂受行とあり、又樂聽如是敎とあるは皆願樂の義なり、之が信樂の中にある願往生の爲の心なれば信に欲生を具して本願を信ずるは何の爲ぞ願生安樂國の爲なり、其願生安樂國は歸命の貌なり、又歸命は往生の爲なればまたこれ發願なりとのたまふ言南無者の發願廻向を機に約して銘文に發願廻向といふは安樂淨

土にむまれんとねがふこゝろなりと釋し、行卷には如來已に發願等とのたまふ此已にといふ文字は其價千金にて此字をよく味ふべきことなり、此已にとは行者の機の願生安樂の發願に先き立て如來已に五刼に發願し永刼に衆生往生の行を成就して夫を衆生に與へたまふといふことなり、故に行者が如來の已に發願廻向したまふを須ひて安樂淨土に生れんと願ふが卽信樂を開きたる欲生なり、觀經なれば韋提の我今樂生極樂世界とある樂生なり。

覺也知也とは月院廣本講義には覺也知也とは字書に知覺とあるを上下して覺也知也とのたまふ、往生一定と覺知し了解しておちつくことなり、散善義に作得生想とあるこれは安樂淨土へ生れんとおもふ同時に必得往生のおもひありといふ、圓乘院略本講義には覺知とは心に合點することなりとある、又開悟院廣本講義に云覺知といふは覺悟了知で如是と了知決定すること淨土に往生せんとねがふこゝろは卽是決定心なり、よて上の善導の釋にも作得生想とありて疑ひなく信ずるところに往生決定のおもひあり、又開華院廣本金剛錄には覺知とは人

の氣づかざるところにて此覺とは夢のさめたること、圓覺經に生死涅槃猶如二昨夢一とあるに同じ、覺如上人の御歌にかはらじな彌陀のみくにゝむまるれはきなふの夢もけふのうつゝもとある、之は淨土に往生して後のこと、今は信の一念に具る欲生心のことで夢のさめたる如く未だ至心信樂をえざるうちは吾身の造惡におそれ定散自力の夢さめず御助けいかゞ往生いかゞと二の足をふみ明に佛智を信ぜずひさしく自力疑心の夢みたり、爾るに至心のまことをもらひ信樂の明信佛智をえて定散自力疑心の夢初て覺めてたのむ一念の時往生治定と夢さめたるこゝちになりたが覺也の訓意なり、未來の成佛手に物にぎりた如く我物になりたが知なり、十九二十の如き生れんと願ふばかりにあらずといふ、私に云覺とは覺悟の義にて欲求するうらにおもひとる覺悟の義あり、故に元祖は往生するぞとおもひとりてとのたまふ、又蓮師はたすけましませとおもふこゝろとのたまふ、此おもふ心の中に覺悟の義あり、知也とはこゝろに信知するがゆへに欲とは知也と訓ず、往生一定とおもひしることなり故に往生せんと欲求す

るところに作得生想の覺知があるなり。

生者卽是成也等成也とは月院廣本講義云之は字書になし不空譯の仁王經に諸法從因成とある、賁註に因生といふべきを因成といふは何ゆへぞといふに成は生成の義なりとある、これは仁王の合疏に一切法は皆從緣成假成衆生とある之一切法は新たに生ずるにあらず五蘊四大假に和合して生ずる如し依て生ずるは成ずるの義なりとある、之らの說によりて今成也と訓じたまふといふ。

作則羅反等月院廣本講義に云之は諸の反切ある中今はサ・サク・の二音を擧げたまふ、爲也とは爲に作の義あり故に作も亦爲なり、起也とは坐起の義にて起居のことなり、此作はなすの義が本にしてすはりているものがたちてものをなす義なり、行とはおこなふ義、始也とは今迄なきものをはじめてなす、役也とは使役にてかりつかはれることなり、生也とは今迄なかりたものをこしらへなしたるは生じたのなり、偖此六訓何の爲に出したまふやといふにこれに二由あり、一に作也の訓は生の字あるを示さん爲めにて六訓の中おはりの生也の訓が入用

なり、二は此六訓の中の初の爲也の訓が入用なり、先づ初の義でいふ時は生に作也の訓はなけれども作に生也の訓あるゆへ轉訓の例を示したまふ意なり、次に爲也の訓が爰の入用なりといふは爲也の訓あるがゆへに欲生の生にも爲也の訓ありといふことを顯さんためなり、故に作也爲也の眞中に細註をおきて兩方の作也爲也の訓の出る譯を示したまふなり、興也とは字書に作者興也の訓ありこれに生の字に作也の訓あるゆへ生の字にも亦興也の訓あるべし、偖欲生の下に成也の訓を出して生は起也の訓なきは如何といふに生住異滅の生は起の義にして生者必滅の義ありて欲生の生に允當ならず、述記に說くは生を成生の生にして非生起生とあるは數論外道は轉變無常を說けども生滅無常を嫌ふなり、卽佛家の眞如の如く一切法を成ずとはいへども生ずるとはいはぬ、生ずといへば滅あるがゆへなり、述記に之を釋してこれは成生の義にして生起の義にあらずといふ今吾祖も生に起也の訓を出したまはぬも其道理にて今欲生の生は無生の生にしてふたゝび滅することなき往生を顯さん爲に成也と訓じたまふ、若無

生生滅なれば本來成佛の義ありやといふに不爾と知せん爲に作也爲也興也の義を出したまふ、猶興也とは若不生者の本願力よりおこるといふことなり、讃彌陀偈に自佛本願莊嚴起とありて興起の義ありといふが月院の說なり、此外の先輩に爰の文を辯じた人なし、偶に開悟院の辯あれども月院を略辯して委き釋なし、偖今私に有師の說を加へて此義を辯ぜば此欲生の生の字訓に成作爲興の四訓のある意はもと此欲生の生は往生のことゆへ因願の欲生も若不生者の生も成就の願生彼國の生も卽得往生の生も皆是往生の生なること勿論なり、其往生は卽成佛なるゆへ此生を訓じて成也とのたまふ、これすなはち淨土論の速得成就阿耨菩提の意なり、作とは論註の早作佛の作の意なり、又因より果に望めていへば願作佛心の作なり、偖此作に三の反切六の別訓あり其六訓の中の爲也とは作をなすと訓ずる義又なると訓する義にして往生は佛になすなるの義なりといふことなり、次に起也とはおこすともおこるとも訓ず之は信心によりて新たに佛果をさとりおこすの義なり、次に行也とはおこなふ義にして信心の因により

て佛果をおこなふことなり、次に始也とは今迄なかりしことをはじめて引きおこす義にして初の字とは違ふ、初の字ははじめはじまると訓じて衣をぬいたちするに刀を以てたつを初とし刀にてきるが初りゆへはじめはじまると訓す、又始の字ははじめと訓じて女の胎內に子をはじめてやどすといふ文字なり、今淨土に往生して成佛すれば久遠劫のはつごとに胎內に始て子がやどる如く此度始て往生成佛するのゆへものゝはじめなることを始といふ、役也とは役は使役の義にて往生成佛は信心の因に使役せられて往生するのゆへ役といふ、生也とは作ははじめて生ずる義なりといふことにて作とは生也と訓ず、時に此六訓は直ちに信心につく義にあらず唯作の字の訓の示訓なり、偖生の本訓の爲也興也とは此は生の字のあたりまへの訓にして此生にはなすの訓あるゆへ爲なりといふ又始めて生ずるには始めて引きおこす義があるゆへ興也と訓ず、偖明暦本の左訓に爲の字にしはざとつけたまふこれはなすなるの意にあらず所爲所作のしはざのことなり、讃彌陀偈に皆是法藏願力爲とある爲の字にて此意を淨土和讃に

安樂佛土の依正は法藏願力のなせるなりとのたまふ、又正像末和讃に智慧の念佛うることは法藏願力のなせるなりとあるは皆法藏菩薩のしはざといふことなり、偖爰に妙なることのあるは上來三信を釋する中に於て此欲生にかぎりて字訓の外に名を立て、大悲廻向之心（ナリ）とある、上に大也悲也廻也向也の訓なき處に此欲生にかぎりて如此大悲廻向の名目を立てたまふは云何といふにこれはこの欲生の生の字に爲也興也の二訓あるは本（もと）に約すれば法藏願力のなせる發願廻向を示す二訓なり、故に往生卽成佛するは皆是法藏菩薩の大悲廻向の所爲所作しはざにて衆生をして淨土に生ぜしめ興行せしめたまふといふことなり、偖上來至心の字訓已來前段迄は皆衆生の機に約する字訓なり、爾るに今爰に明に大悲廻向之心なりと法に約して釋してあるは上の至心信樂欲生の三信は衆生の煩惱の意の中におこす三信なれども悉く法藏菩薩の大悲廻向によりて行者の心中にうるのゆへこれみな法藏菩薩のしはざによりて往生するぞとおもひとるなり此おもひとるは欲生の欲の字なれども佛願力の廻向によりて往生するぞとおもひとるのゆへ往生は佛の方よりのしはざなるゆへ御文に佛の方より往生は治定せしめたまふとある意なり、故に此欲生の下より伺へば此三信は皆悉く彌陀の方に成就して廻向したまふ勅命なりといふことを顯す吾祖の御意なりと乍恐伺ひ奉る已上、略して信卷に於ける三十三訓をば辯じ終る。

三信三十三訓講義 終

大正五年九月十五日印刷
同　年九月二十日發行

定價金貳拾錢

著作者　故蓮元慈廣
著作者　蓮元賜
著作者兼發行者　西村七兵衛
印刷者　京都市下京區中珠數屋町烏丸東入廿人講町廿二番戶

發行所　京都市東六條　電話下四五八番　大阪口座一七〇四番　法藏館

不許複製

宗乘講義書目

南條文雄▼式嘆德文講義　定價金貳拾錢
松原深明▼後生助ヶ玉へ續不續要論　定價金參拾五錢
香嚴院惠然▼安心決定鈔鑽仰　定價金拾八錢
牧野神爽▼改悔文講話　定價金壹圓
牧野神爽▼御文五帖目講話　定價金壹圓
菅原碩城▼專雜得失章略解　定價金拾五錢
菅原碩城▼嘆德文略解　定價金拾五錢
松原深明▼現生不退要論　定價金拾五錢
朝倉了昌▼正信偈鑽仰　定價金貳拾錢
朝倉了昌▼五惡段講演端身正行　定價金貳拾貳錢
靈城▼五帖一部御文安心要論　定價金五拾錢
村上專精▼文類聚鈔百二十題決擇記　定價金八拾錢

發行所　京都市東六條　電話下四五八番　大阪口座一七〇四番　法藏館

文學博士　南條文雄講師新著

報恩講式歎德文講義

仰ぎ念々高く思へは益々深く親鸞聖人の恩德なり茲に嘆德文あり その詞花の如く巧に宗祖の傳歷を讃仰せり而も古來之が註解の良著に乏しく何人も一誦讀つて其意を解せざる也南條博士の此著師が梵語學上發揮すること所多し今や御遠忌前何人も一本を購ひ布教に資すべく又一代の講解懇到加ふるに祖恩を慕ふべき也

顯明院大谷勝珍師題辭
文學博士眞宗講師　南條文雄師題辭

學師　松原深明師著

定價　貳拾錢

後生タスケタマヘ續不續要論　全

後生助ケ給へは、安心の骨目だ。宗學の關鍵だ。殊に助ケ給への思ひが、信後まで續くか續かぬか、一念に限るか、後念まで通ずるかは、千古の難問題ぢや、昔からまだ誰も明に解決してゐぬ。こんな事の書いた書物は一冊もない。我安心論壇の重鎭、深明師の此著、實に青天の霹靂である。白晝の爆裂彈である、書中古來の異義を一々評破し、幾多の係爭問題を悉く決擇し、憶面もなく已が意見を發表した、實に近來の快著述だ　苟も安心に心がけあるもの、恐らく讀まずには居られぬであらう

定價　參拾五錢

發行所　京都市東六條　電話下座二二五四　八五番　法藏館

講師　吉谷覺壽師新著

眞宗要義

菊判　七百頁
定價貳圓四拾錢
特價金貳圓
郵稅拾貳錢

眞宗教義の研究從來に在つて甚だ困難なるは宗義全斑を概括せる良書なきに困る、偶ま一部の聖典を講じ、又はちぎれ〳〵の論題を攻究するあるも未だ統一的組織の下に各方面の教義を網羅して秩序ある叙述を試みたるものなし、一乘院講師茲に一代の蘊蓄を傾け該博の學識を以て緊要なる宗學中心の論題八十條を組織的體系の下に論述し克く此の最大難事を果す、講師自ら曰く是れ予が宗學最後の著述也と、以て前の「眞宗安心詮要」と相待ちて本書の世の缺陷を補ひて學界に貢献する多大なるを知るべき也

講師　一乘院覺壽師撰

眞宗安心詮要

他力安心の要義廣く聖典講錄の上に散在せりと雖も異說紛々茫洋の感なき能はず著者は宗學の泰斗茲に希有難遇の御遠忌に際し喜びの餘り紀念のため數十年來研究の蘊蓄を傾け相承學說に於ける最近發揮の精義を盡し、念佛爲本、信心爲本、信願交際、一念の義相、タノムタスケタマヘ、初起ノ覺不、續不續機法一體、佛凡一體等安心中心の問題を本書に解決す今や世上異安心問題喧々たる時世の心あるもの本書により疑惑を晴らすべき也

定價四拾五錢

發行所　京都市東六條　電話下座一四〇七　八五四番　大阪口座一四〇七　法藏館

講師 一乘院覺壽師著

教行信證六要鈔講讃

總布クロース 背表金文字入 全文四號活字 總頁數壹千頁 定價參圓八拾錢

「御本書」六軸は是親鸞聖人立教開宗の典籍にして眞宗肝腑、信仰の奥義茲に在り、蓮如上人この「六要鈔」を閲して三度其表紙を破れりとかや、流を汲める道俗拜誦鑽仰一日も怠るべからず、今や一乘院吉谷講師該博の識に憑り畢生の精力を注ぎて克く古今の異義を楷定し微を穿ち要を提げ何人にも深く宗祖の幽旨を眞に窺ひ得しむ是れ講師一代の大著述たるのみならず由來「六要」は難解難入の法藏幸に此講讃の鍵を得て容易に開き得べき也

講師 一乘院覺壽師新撰

五帖一部 御文講述

菊判洋綴總布クロース 一千頁内外 定價 參圓八拾錢

五帖八十通の御文は實に是れ他力安心の骨目にして凡愚往生の手鏡也中興大師切々の悃誠文々句々に溢る然るに古來全部貫通の講解甚だ稀にして偶ま數部あるも繁簡時代に適せず爲に朝暮拜誦しつゝ更に之を深く研窮鑽仰する者尠し是れ世に異解異安心熾盛にして邪路に迷ひ易き所以也。講師之を憂ひ多年研精拮据の餘五帖一部を貫き平易明截の講述を施す内外僧俗を問はず乞ふ速に安心の標的を此に定め大切の手鏡に不審疑惑の曇翳を拭ふべき也

發行所 京都市東六條 電話 大阪口座一七〇四 下 四五八番 法藏館

故嗣講 牧野神爽師著

改悔文講話

四六判總クロース 洋裝背表金文字 印刷美麗四百五十頁 定價金壹圓 郵稅八錢

是れ恐らく宗學安心界に破天荒の珍書ならん、古來の講義の如く徒に文相釋義に止らず極めて緻密なる安心上の諸問題雜行につき雜修につき捨雜歸正につき悉タノムの義助ケ給への義報謝の念佛等につき深く古來の諸說を擧げて學解自督相待ちて明快の批判を與へ師が用ゆる憑るべきの正義を明かにせり著者生前秘藏して曾て人に示さざりし所なり是を讀まば師が但に世の說教者にあらずして蘊蓄深きかたるに驚底の布教家にせよ、信者にせよ速に異解不正義を離れて安心の正意を知らんと欲せば必ず本書を讀め

講師 池原雅壽師新著

最要鈔講義

全一冊 定價 參拾五錢

最要といへる其名の如く他力信仰の最大要義を說破せるは本鈔也も佛恩の稱名等に斷案を得んと欲せば、本鈔を研究し「御文」の源に溯りて一念業成他力つきて最後の要を提徑とする況んや著者は方今の教界を顯示せり邪論異端に陷り易き時本書の出るに偶然ならんや

發行所 京都市東六條 電話 大阪口座一七〇四 下 四五八番 法藏館

擬講　間野闡門師著

▼六字釋講話

定價金參拾五錢

善導大師の六字釋は我が他力の極致を御示しになつたもので古來から宗乘學者が熾んに論究したものであつた。本書は序講六字釋緣由と本講正釋とに分ちて、斯學の蘊奥を盡したものであるから、宗意安心研究の上にとりても是非一讀すべき書である、敢へて同好者に一本を勸める。

擬講　岸本義道師編輯

▼先德芳談

定價金參拾五錢

高倉の先輩、恵空、香月院、雲華院、香樹院、香山院其他嗣講、擬講等孰れも一代の碩學名德、その一言一行悉く栴檀の香を止め、一一笑亦た蘭菊の芳を奪ふ、「貫練叢誌」是れを天下に集めて誌上を飾ること數年、今や悉く本書に收む書中敎訓ありまた安心ありまた逸話あり詩歌あり先德の面目紙面に躍如たり、若し一本を携へば以て座右の銘とすべく以て銷夏の好伴侶たるべきなり。

擬講　間野闡門師編纂

▼眞宗安心示談

定價金六拾錢

虛飾なき同朋の熱誠なる求法質疑に對して他力安心の極致について、噛んでくゝめやうに應答懇話せられしもの、これが批判の任に當れるは實に舊高倉大學寮貫練會の講師嗣講擬講學師十七名なり是れぞ天下に於ける正統安心の發表ならずや苟も一流正義の眞信に住せんとするもの何人も乞ふ必ず之を一讀せよ

發行所　京都市東六條　電話下四五八番　大阪口座一七〇四番　法藏館

擬講　太藤順海師著

一念覺不論

定價貳拾錢
郵稅貳錢

本論は眞因決了の時刻の極促について論する一家安心論題中の至要なるものなり近時不言講布圓被の秘事法門者流が一念に覺ありと絕叫せるに對し議論紛々駁難囂々底止する處を知らず著者大谷大學研究院に在り宗學研鑽に際し本題に對し深く研究を試みる處あり犀利なる觀察と該博なる識見は遂に本書を成す先づ香月院、成廣院、香山院、威力院、賢藏嗣講、三州圭州寮司、風船寮司、清涼閣、足利義山諸師古來本大兩派に亘る諸說を拾收羅列し更に自義を十四題の下に叙述し邪說異端を爬羅剔抉し快劍陣を斫るの概あり蓋し宗學界近來の珍書たることを信ず

擬講　太藤順海師編纂

御傳鈔鑽仰

定價拾貳錢
郵稅貳錢

目次

上卷

第一段　出俗入眞……太藤順海師
第二段　吉水入室……德永義統師
第三段　同　六角夢想……間野闡門師
第四號　蓮位夢想二……岩越御導師
第五段　源信行附屬附荒影圖畫……藤辻容信師
第六段　同　其二……藤原要眼師
第七段　信心靜論……松室春曉師
第八段　定種夢想……橫井觀瑞師
大東觀道師

下卷

第一段　北越遠流……佐々木靈秀師
第二段　稻田幽栖……岸本義導師
第三段　辨圓濟度……淺井德誠師
第四段　箱根靈宮……稻葉敎山師
第五段　熊谷靈告……竹越徹道師
第六段　同　其二……佐藤得聞師
第七段　聖人還化……飛鳥井義天師
滅後利益……土山誓海師

發行所　京都市東六條　電話下四五八番　大阪口座壹七〇四番　法藏館

擬講 太藤順海師著

六字釋講草

定價 五拾錢
郵税 四錢

言南無者の釋は他力の淵源、信仰の堂奥也、故に古今の龍象、東西の學匠沈思研鑽蘭菊美を競ふ、著者内に之を研究し外に之を講ずること歳あり遠く善導法然に遡り「行卷」「銘文」「執持鈔」より近く「御文」に亙つて、細大漏さず具に學説を陳ね深義を發揮し詳に安心の極致を説きて餘蘊なし、苟も宗學に志し他力信仰を研究せんとするもの、必ず本書に就て六字の妙釋を色讀翫味すべき也。

擬講 太藤順海師著

二種深信要決

定價 參拾五錢
郵税 四錢

他力安心を語るもの二種深心を語らざるなく而も東西古今の異解異安心概ね二種深心より出づ、宗學上機法深信の研鑽重きこと知るべき也。然るに從來之に關する參考書乏しく志學の徒常に岐路に泣く、今や本書の出づるありて古今の學説東西の諸義掌を指す如く犀利の決擇燈火より明かに、優に學界の大缺陷を補ふべき也。

發行所 京都市東六條 電話 下四五八番 大阪口座一七〇四番 法藏館

37

327
881

終